早稲田大学博士論文(審査報告書)		
2012	学位記	文科省報告
	6092	甲 3722

早稲田大学大学院社会科学研究科

博士学位申請論文審査要旨

申請学位名称	博士（学術）
申請者氏名	唐澤　太輔
専攻・研究指導	地球社会論専攻　生命倫理学研究指導
論文題目	「中間」と〈中間〉 —南方熊楠　夢の記述に関する研究／「やりあて」と関連させながら— The Middle Place and The Intermediate Place —A Study of Kumagusu Minakata's Descriptions of Dreams and Relationships between His Dreams and Yariate—

審査委員会設置期間　自　２０１２年　２　月　９　日
至　２０１２年　７　月　１２　日

受理年月日　２０１２年　２　月　９　日

審査終了年月日　２０１２年　７月　１２　日

審査結果　合　格

審査委員

	所　属	資　格	氏　名
主任審査員	社会科学総合学術院	教　授	那須　政玄
審　査　員	社会科学総合学術院	教　授	内藤　明
審　査　員	明治大学野生の科学研究所	教　授	中沢　新一
審　査　員	高野山大学文学部	教　授	奥山　直司

この論文は、南方熊楠(1867～1941年)による、夢に関する記述と、「やりあて」(偶然の域を超えた発見や発明・的中)について、さらに「南方曼陀羅」の本質について考察を行うものである。またその考察を通じて同時に熊楠の所有する特異な性格に焦点を当て、それを明確にするために、「中間」と〈中間〉という言葉を使って、熊楠の特異性を明らかにする。「中間」とは、自己が対象と健全な関係を保つことができる(「適当な距離」にある)場所であり、〈中間〉とは、「自己と対象が統一された場所」＝「一」へと至る可能性をもつ場所、であるとする。したがって〈中間〉においては、自己と他者の区別は不鮮明となると言ってもよいし、自己が無くなると言ってもよい。

熊楠は「夢の採集者」であった。隠花植物や粘菌を採集し写生・記録したように、夢に関しても膨大な数の収集と記録を行った。そして、夢の記録は熊楠自身のものだけに留まらず、家庭を持ってからは、時に家族や女中が見た夢までも聞き出し、記録している。本論文は、このように熊楠が夢にこだわり続けたことまた熊楠による夢の分析から、熊楠の在り方を知る手がかりとしようとしている。熊楠は夢を記録することで何を知ろうとしたのか。また夢と「やりあて」は、どのように関係しているのか、これらの問いが、本研究の中心に据えられている。

われわれとは異なる熊楠の「在り方」は、他者との距離が極端に「近いか」、あるいは反対に極端に「遠く離れて」しまうかのどちらかであった。つまり熊楠は、われわれが通常当たり前なものとしてもっている「適当な距離」というものをうまく保持できなかったのである。このことは、熊楠による、執拗なまでの夢の探究と深く関係している。

われわれは、熊楠が特異稀なる天才であったことは知っている。しかし、その天才の「実質」については知らない。というのもわれわれの場所から熊楠を捉えようとしても、熊楠はあまりにも軽やか自他融合に近い場へと移行してしまうからである。熊楠という天才を本当に知るためには、彼の本来の「居場所」を突き止めなければならない。これが本論文の「熊楠論」の基盤である。

本論文の目次は以下のごとくである。

〈目次〉

要旨・・・…(v).
南方熊楠略年譜・・・…(ix)
南方熊楠の生涯・・・…(x)
各章ごとの関連図・・・…(xv)
凡例・・・…(xvi)

序章・・・…(1)
　第1節,　目的(2)
　第2節,　先行研究(7)
　第3節,　研究の方法(9)
　第4節,　本稿の構成(13)

第1章　夢の記述、その方法と経緯・・・…(21)
　第1節,　夢を記録し、考察すること(22)
　第2節,　夢の思い出し方(24)
　第3節,　夢と現実の境(28)
　第4節,　熊楠に見る「無」と「不安」について(32)
　第5節,　日記における夢の記述の変遷(34)

第2章　熊楠と羽山兄弟――intimateな関係――…(37)
　第1節,　羽山兄弟の夢で始まり、羽山兄弟の夢で終わる日記(38)
　第2節,　羽山兄弟とは――「アニマ」の投影――(40)
　第3節,　「intimate」な関係――深友としての羽山兄弟――(44)
　第4節,　失われた「片割れ」を求めて(48)

第 5 節,　その他、日記に見る羽山兄弟に関する夢の記述(51)
第 6 節,　絶対的な片割れの喪失体験(58)
第 7 節,　エネルギーの源泉(62)

第 3 章　「事」としての夢・・・…(65)
第 1 節,　覚醒時の状況の考察――外的・物的要因――(66)
第 2 節,　夢と「空間」に関する考察(69)
2-1,　夢と幽霊の相違(69)
2-2,　幽霊に関する「近さ」と「遠さ」(72)
第 3 節,　夢の出所の考察――内的・心的要因――(74)
第 4 節,　「事の学」への昇華(77)
4-1,　「事」、「心」、「物」(77)
4-2,　「物」と「心」――誘発するものと誘発されるものとの関係――(79)
第 5 節,　夢の原因を探る 1(81)
5-1,1894 年――覚醒時の状況と心に留まった想い――(81)、5-2,1903 年――幽冥に関する問答他――(83)、5-3,1904 年――連想に次ぐ連想――(89)、5-4,1907 年――亡父・母・妹――(91)、5-5,1908 年――松枝の夢――(93)、5-6,1910 年――本・雑誌からの影響――(94)、5-7,1911 年――ロンドン時代の夢/雷様の原因――(96)、5-8,1912 年――飛翔の夢他――(97)、5-9,1913 年――大山神社合祀遺憾の念『大英類典』の影響――(103)
第 6 節,　小括(106)
第 7 節,　夢の原因を探る 2(108)
7-1,1914 年――足への影響が及ぼす夢他――(108)、7-2,1915 年――平瀬作五郎――(111)、7-3,1916 殉年――夢の原因についての「関係図」――(112)、7-4,1917 年――刹那に見る夢――(114)、7-5,1918・年――心の及ぼざる処ろ誰か之を夢みん――(115)、7-6,1919 年――錯綜する夢――(117)、7-7,1920 年――松枝が死ぬ?夢――(119)、7-8,1921 年――川根米――(121)、7-9,1922 年――夢の中で学ぶ――(122)、7-10,1923 年――風呂と亀――(124)、7-11,1924 年――ロンドンの少年――(126)、7-12,1925 年――夢を見ない日々――(127)、7-13,1941 年――晩年における考察――(128)
第 8 節,　見えてくる事(129)
第 9 節,　「中性者」になり得なかった熊楠(130)

第 4 章　夢と「やりあて」…(135)
第 1 節,「やりあて」とは(136)
1-1,　「やりあて」の語源と定義(136)
1-2,　「やりあて」と tact(141)
第 2 節,　熟練能的 tact による「やりあて」――生物の発見を中心に――(145)
第 3 節,　ウチワカズラの発見(やりあて)(152)
第 4 節,　主客合――による「やりあて」(155)
第 5 節,　ひきつける要素あるいは親和性(158)
第 6 節,　熊楠の挙げる「やりあて」の事例(161)
第 7 節,　発見的創造と芸術的創造(164)
第 8 節,　ひらめきと創造的活動(165)
第 9 節,　記述の相違(166)
第 10 節,　熟練能的 tact による「やりあて」の他の事例(171)
第 11 節,　生得的 tact による「やりあて」――身近な人の死を予知する――(173)
第 12 節,　夢・幻・幽霊(174)
第 13 節,　死の予知夢(177)
13-1,事例①――宇治田虎之助の戦死――(177)
13-2,事例②――目良三柳の長男の病死――(178)
13-3,事例③――羽山芳樹の病死――(179)
第 14 節,　telepathy への関心、マイヤーズへの傾倒(182)

第 15 節,　密かなる「やりあて」の実験(194)
第 16 節,　何が「死の予知」を可能にするのか(199),
16-1,　C.G.ユングの「共時性」の概念を手掛かりに(199)
16-2,　rapport について(202)
第 17 節,　娘・文枝の話より(207)
第 18 節,　資料『ヒューマン・パーソナリティー』に言及した論考(211)

第 5 章　熊楠の採集・観察行為…(235)
第 1 節,　熊楠にとっての「採集(収集)」と「観察(写生・記録)」の意味(236)
第 2 節,　「取り入れ同一化」としての「採集」、「投影同一化」としての「観察」(239)
第 3 節,　熊楠が粘菌に見出していたもの(243)
第 4 節,　統一と分裂(245)
第 5 節,　近さと遠さ(248)

第 6 章　「大不思議」――根源的な場をめぐって――・・・…(257)
第 1 節,　「大不思議」を論じる理由(258)
第 2 節,　「南方曼陀羅」の概要(260)
第 3 節,　統合失調症者のいる場所(264)
第 4 節,　「大不思議」と「理不思議」の関係(267)
第 5 節,　なぜ「分離」するのか(270)
第 6 節,　熊楠が「大不思議」を構想し得た理由(272)
第 7 節,　熊楠は、なぜ自己を保持できたのか(276)
第 8 節,　フロイトの「死の欲動」論から(277)
第 9 節,　「根源的な場」への問いの発生(279)

終章　「中間」と〈中間〉――熊楠のポジションについて――・・・…(283)
補遺,臨終の夢(299)

データベース使用例・・・…(305)
データベース資料・…・・(310)
1,「日記 1」(310)
2,「日記 2」(319)
3,「書簡」(328)
4,「論考」(333)

参考文献一覧・・・…(343)

あとがき・謝辞・・・…(349)・

付録 CD-R データベース資料

[序章]では、本研究の目的・先行研究・研究の方法・本稿の構成について述べられている。熊楠の夢への言説、そして熊楠という人物そのものが教えてくれること――それは、一言で言えば「距離」である。熊楠は他者との関係において、特異な「距離」しか採ることのできない気質の持ち主であった。極端に「近い」か、極端に「遠い」か、そのどちらかであった。いわば「適当な距離」=「中間」における「自己―他者」関係を採ることが非常に苦手だった。

しかし、そのような「極端な距離」しか採れなかったことが、彼の超人的なパワーの源でもあった。日本民俗学の父・柳田国男(1875～1962 年)は、熊楠を評して「日本人の可能性の極限」とまで言っている。「適当な距離」を当たり前のようにとっているわれわれ大多数は、普通、「距離」ということを深く考えることはない。「極端人」であった熊楠の言説・生き方は、この当たり前である「適当な距離」とは一体何なのかをわれわれに深く考えさせてくれる。

熊楠の夢への言説・生き方・在り方は、われわれの「常識」に疑問符を投げかける。われわれにとってあまりに当たり前であまりにも身近すぎて、見落としているものを、熊楠はわれわれに気付かせてくれる。同時に、われわれ個々人の生(個的生命)に含まれながらも、それを超え出てさらに大きく包み込んでいる場=「統一〔根源的な場〕」、つまり「生命そのもの」についての手がかりも与えてくれる。

[第 1 章]ではまず、熊楠の夢の記述方法(及び熊楠独自の「夢の記憶法」)と、その記述の経緯を概観する。また、覚醒後も、夢か現実か区別のつかないことの多かった熊楠の様子を、彼の日記の記述から見ていく。

熊楠はしばしば、非常にリアリティーをもった夢を見ている。そして、熊楠の日記からは、夢の世界から必死に現実世界に戻ろうとする彼の姿が見て取れる。つまりそれは、自他融合の場に近い自他不鮮明な場から、もとの区別ある状態へ引き返そうとする、あるいは自己の「ポジション」を再確定しようと懸命になっている熊楠である。そして、もし熊楠がこの「退路」を見失ってしまったら、果たして彼には何が待っていたのかを、「無」と「不安」から考察する。

次に、熊楠の日記における、夢の記述の変遷を見る。1888 年から晩年(1941 年)まで続く夢の記述において、最も恒常的に夢に見ている事柄は、羽山兄弟(繁太郎・蕃次郎)に関するものであった。

「やりあて」に関する記述は、「那智隠栖期」以降、急激に増えている。夢の原因、「覚醒時の周りの状況」・「夢の出所」についても、生涯変わらず記録し続けた。

この第一章の事柄を踏まえた上で、第 2〜4 章では、「やりあて」と夢との関係を中心に考察する。そして、第 5 章と第 6 章では、熊楠の夢と関連させながら、特に熊楠の「在り方」へとアプローチし、さらに「生命そのもの(根源的な場)」とは何かを問う。終章では、自己が他者といわゆる健全な関係を保てる「適当な距離」を「中間」とし、「全てが統一された世界」と「現実界」をつなぐ場所を〈中間〉とした上で、熊楠の「ポジション」について論ずる。

[第 2 章]では、熊楠の夢の記述の中でも、特に多く登場する羽山兄弟を取り上げる。熊楠の日記における夢の記述は、羽山兄弟に関することで始まり(1888 年 6 月 16 日)、羽山兄弟に関することで終わる(1941 年 11.月 30 日)。羽山兄弟は、熊楠が在外中に夭折するが、この兄弟は熊楠にとってまさに自分自身であり、あるいは自分の中の「他者」であった。この羽山兄弟の喪失が、熊楠に何をもたらしたのかを、ヘーゲルの哲学及び C.G.ユングの深層心理学(元型論)を援用しながら考察する。そして、羽山兄弟とは、熊楠の欠落した部分を補う「アニマ」であったことを示す。そして「アニマ」を巡る熊楠の戦いが、熊楠の生き様であったことを明らかにしようとする。

[第 3 章]では、特に筆者が作成した「データベース資料」を参照にしながら、熊楠の夢の考察が、どのように「事の学」へと昇華し、さらにその後どのように展開していったのかが述べられる。「心」と「物」が交わる「事」たる夢を、熊楠が日記にどのように記述していたのかを中心に見ていく。われわれにとっては「内的・心的要因」と「外的・物的要因」が交わり、夢が現出するという事は、さほど不思議なことではないように思われる。なぜならわれわれは、自己(心)と他者(物)が適度に交わる「場」について、殆ど深く考えたことがないからである。いや、考えるまでもなく、われわれはそのような「適当な距離」を保持してしている。

しかし、熊楠と対象の「距離」は、極端に遠いか極端に近いかであり、つまり、自己(心)と他者(物)が全く分離する程離れているか、ぴったりと合わさってしまう程接近しているか、そのどちらかであった。故に熊楠にとって、両者が適度に交わる「事」とは、極めて不思議な在り方であったのである。熊楠には常に、夢の世界から現実の世界へ戻ることができなくなるのではないかという不安があった。いつも「退路」を見失うことをあらかじめ考えておかなければならなかったのである。熊楠にとって、自分をしっかり確保しておくためには現実の世界と夢の世界とをはっきり見極めておく必要があったのである。夢と現実の違いを当たり前のようにわきまえているわれわれとは異なって、熊楠にとってそれは、当たり前の事柄ではなかったのである。

熊楠が執拗なまでに夢の原因を追究し続けた背景には、「適当な距離」が保持できないという切実な問題があったのである。熊楠は、「適当な距離」において空談するような「世人 das Man」にはなれなかった。

[第 4 章]では、マイケル・ポランニー(Michael Polanyi1891～1976 年)の「暗黙知」・「潜入・内在化 indwelling、C.G.ユングの「集合的無意識」の考えを取り入れ、熊楠の(夢などによる)「やりあて」が、いかにして可能になったのかを中心に述べられている。「やりあて」とは、はっきりと意識化していなくても或る事が出来てしまう現象のことであるのだが、ここでは、熊楠の言う「tact」を、「熟練能的 tact」と「生得的 tact」に分けて、「やりあて」の質について考察がおこなわれている。「tact」とは「適否を見極める鋭い感覚」などと訳される。その「tact」を発揮し「やりあて」るには、長年の熟練が必要である。例えば、いわゆる「職人技」などはそれにあたる。つまり「職人技」は「熟練」によって鍛え上げられた「tact」を必要とする(=「熟練能的 tact」)。一方、例えば「死の予知」、これも「やりあて」と言えるものだが、それには「熟練能」は必要ない。むしろ、生まれ持っての素質(innateness)がものを言う。「生得的な」素質による「tact」が必要なのである(=「生得的 tact」)。さらに筆者は、「熟練能的 tact」による「やりあて」を、「発見的創造」と「芸術的創造」に分類した。前者は、「indwelling(対象への潜入・内在化)」→「(諸細目の)統合」→「ひらめき」→「行為」→「やりあて」という段階を経るものであり、後者は、自我を瞬間的に滅却し対象と一体化することによって成し遂げられるものである。本章では、両者のプロセスを、図を用いて検証している。次に、「生得的 tact」による「やりあて」である「死の予知夢」を、熊楠の記述する事例から考察する。また、どのようにしてこの種の「やりあて」が可能になるのかを、ユングの「共時性」の概念を手掛かりに論ずる。そしてこの「やりあて」が可能になる場こそ、「南方曼陀羅」で言うところの「理不思議」であったことを示す。

最後に、熊楠にオカルティズムへの考え方を一変させた、マイヤーズ(FrederickWiliamHenryMyers1843～1901 年)の『ヒューマン・パーソナリティー Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1&2』はどのような書物であったのかが考察される。この本は未だ翻訳(和訳)出版されていない。ここでは、熊楠が自身の論考において同書を参照した箇所を和訳してある。今後、マイヤーズ及び心霊現象研究を行う者に対して、意義ある資料となると思われる。

本章において筆者が主張したいことは、「やりあて」や「テレパシー」、「ラポール」といった現象の有無ではなく、それらを脳科学などに丸投げせず、哲学的に考えることが、人間の「在り方(自己一他者関係)」を深く知るための鍵となり得るということである。

[第 5 章]では、熊楠の「やりあて」、特に筆者が言うところの「熟練能的 tact」による「やりあて」を考察する際に、欠かすことができない事柄——熊楠と対象との在り方——について述べられている。熊楠による「採集」と「観察」という行為を、「取り入れ同一化」と「投影同一化」(S.フロイト、メラニー・クライン) をキーワードにして、南方熊楠という人物そのものに迫ろうとする。熊楠が、粘菌、特に原形体に見出していたものとは何だったのか。それは、熊楠自身に欠けたもの(アニマ)であった。熊楠はそれを取り入れ、あるいは自分自身をそれへと投げ入れることで、「完全性(統一)」を希求したのである。しかし、この「統一」はすぐに「分裂」する。それはなぜなのか。この問いについて、ヘーゲルの言う「無限性」をヒントに考察がなされる。熊楠は、他者から極端に離れてしまうため、「奇人」・「変人」と呼ばれることがあった。そしてあまりにも離れすぎた「距離」に自ら気づき、それを埋めるため、そして完全な自己像を求めて、再び「採集」・「観察」へとのめりこんだ。このような繰り返しが熊楠の生き方には如実に見られる。熊楠と対象との関わり合いを深く考察していくとき、これまで多くの書物等で語られ、そしてわれわれの多くがイメージするようになった、彼に対する「強靭な精神を持った森の巨人像」とは全く正反対の、「狂人」になってしまうことを恐れながらも常にその近くにしかいることができなかった「不安定な自我の持ち主」という熊楠の一面が見えてくる。熊楠は常に、自我の消滅・人格の死と隣り合わせにいたと思われる。それは熊楠にとっては苦しみであったであろう。しかし、そのことが南方熊楠という人物を極めて特異で魅力的なものにしていることも確かである。

[第 6 章]では、「南方曼陀羅」解釈における最大の難関、「大不思議」とは何かについて論ずる。(夢などによる)「やりあて」が可能になる場を「理不思議」としたとき、その領域と、「大不思議」との関係はどのようになっているのか、さらに熊楠の立っていた「場所」とはどのような処だったのかを、「通路 (パッサージュ)」(ヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin1892～1940 年)の概念を用いて考察する。(ベンヤミンは「通路」を「商店であり住居」、「家であり道路」である

とし、それを両義的なものとして位置づける。それは、単なる「道路」ではない。両極の特性が未だ残りながらも混じり合う、ある種「特殊な場」なのである)。さらに、「大不思議」こそ、全てがそこから生まれ、全てがそこへ帰還する「根源的な場(生命そのもの)」であることを、熊楠の言葉から明らかにする。簡単に言えば、「理不思議」とは、自己と他者の区別が不鮮明になる領域であり、「大不思議」とは、自己と他者が完全に融合した領域である。自他が融合した「根源的な場」からの「力」を感じつつも、まだかろうじて「自己」であることが可能な場、これこそが熊楠の言う「理不思議」という領域であった。本章では、そこにおいてこそ「やりあて」が可能になることを明示する。熊楠は、自己と他者の区別が不鮮明になる場(理不思議)に、しばしば立っていた。彼は統合失調症に極めて親近性のある気質の持ち主だったように思われる。自己と他者の境界が不鮮明になっている統合失調症者は、かつて「健全」であった状態、つまり自己と他者が明確に区別されていた状態へ戻ろうとして苦しむ。自他が不鮮明な場所に留まることは、「現代社会」においては「異常」とされるのである。しかし、もし自己と他者の区別が不鮮明な場が、「生命そのもの」(「根源的な場」)であるとするならば、「異常」を有しているのは、実はわれわれの方であるということになる。自己と他者の「区別」を徹底化し、そこに安住しようとすることは果たして「正常」なことなのであろうか。「統一(根源的な場)」こそ「真」であるならば、そこから完全に離れ、さらにそこから目を背けようとすることこそ「異常」なことなのではないだろうか。

われわれは、「大不思議」という「根源的な場(統一)」から分離されて、各々「個人」の生を営んでいる。とはいえ、やはりわれわれは、この「根源的な場」に根ざしてもいる。だからこそ、われわれはこの「根源的な場」への問いを発することができるのである。本章では、熊楠による「大不思議」への言説を基に、人間の「あり方」を考察されている。

以上の考察から、終章における結論が導き出される。

[終章]では、「中間」と〈中間〉の位相の違いと、熊楠の居た「場所」を議論の中心に据える。簡単に言えば、「中間」とは、自己と対象とが「適当な距離」にある場所であり、〈中間〉とは、「自己と対象が統一された場所」と「現実界」との「間」の場所である、とする。熊楠は、ある論考において、「夢というものは、この世(現実界)とあの世(統一・無)の〈中間〉に位置するものだ」という、興味深い言葉を残している。「統一」とは、楽園(エデンの園)でもあり、狂人(無)の域でもある。熊楠は、ふとした瞬間に自身の「アニマ・片割れ」と同化し、この「統一」へと入りこんでしまうような気質の持ち主だった。そのような熊楠が、生涯をかけて「中間」を求め続けた真の理由を明らかにする。さらに、「個的生命」と、「生命そのもの」の関係について、「南方曼陀羅」を基に考察がなされる。「事」という「中間」領域は、自己(心)が他者(物)と適度な関係を保持する処である。いわば、われわれ「個的生命」が生きている日常世界でもある。そして、この「個的生命」に含まれながらも、それを超え出ているものが、「生命そのもの」である。それは「南方曼陀羅」で言うところの「大不思議」にあたる。さらに、「個的生命」が営まれる場と「生命そのもの」は、両者の〈中間〉である「理不思議」という「通路」によってつながっていることが示される。熊楠は、この両者が混在する「理不思議」に、身を置くことができた。

以上の考察を踏まえ、この「通路」こそが、人間の「在り方」を探究する際、最も重要な鍵であるという結論を導き出す。補遺では、熊楠の最晩年の夢を、彼の近親者の言葉から紹介する。[データベース使用例]では、付録 CD-R の「〔データベース資料〕南方熊楠　夢の記述に関する研究――「やりあて」と関連させながら――」の使用方法を説明する。巻末にはデータベース資料(「目記 1」〔1885～1913 年の日記〕・「日記 2」〔1914 年～1925 年、1941 年〕・「書簡」・「論考」)を添付する。付録 CD-R データベース資料は、関連項目からリンクを貼り、夢に関する記述の全文・抜粋を PC 上で閲覧することができるようになっている。また、熊楠の夢に登場する人物の詳細(経歴、熊楠との関係など)も見ることができるようになっている。さらに、年代を追って「熊楠にまつわる主な出来事」も閲覧できるようになっており、本データベース資料は、熊楠に関する、いわば「総合事典」的役割を果たすものとなっている。

※

熊楠による夢への言説を考察することは、人間の「在り方」(自己―他者関係)、そして〈中間〉というものが、いかに可能性に満ちたものであるかを知るための重要な契機となり得るはずである。本研究では、夢は現実とは違う次元のものとして捉えられるのではなく、むしろ「おのれと

世界との統一を見いだす精神の運動」という立場に重きが置かれている。その結果本研究では、二つの成果を上げている。一つは南方熊楠という「Extreme Person(極端人)」に、哲学・心理学なアプローチを、言い換えるならば超領域的(trans-disciplinary)なアプローチの可能性を示したことである。このようなアプローチ方法はおそらく今までにはなかったものである。もう一つは、熊楠の夢の記述に関する「データベース」を作成したことである。この「データベース」の用途はさまざまである。特に今後、熊楠の深層心理の研究、あるいは精神医学的な研究を行おうとする人々に対し、基礎的な資料を提供することになろう。それは、熊楠という「巨人」を捉えようとする際には、最も有効な手段でもあるだろう。さらに筆者は本稿において、〈中間〉という、おそらく人間の「在り方」を考察するための、絶対的な条件とでも言うべきものを、南方熊楠の思想を通じて、明らかにすることができた。それは、われわれにとって、最も近いが故に最も遠いものを考究するための、いわば「前提」でもある、といってよいだろう。

この論文に関する審査員の意見。

○熊楠の「夢日記」から、「やりあて」さらには「南方曼陀羅」(今まで熊楠を理解するうえで壁となっている事柄)を連続的に理解しようとしていることに独創性が認められる。夢は熊楠の大切な部分であるのだが、今までこのような研究はなく、よくここまで夢を読み解いたと感心する。また筆者は、物事の本質に迫るための「スキル」は十分に身に着けていると思われる。ただし表題の『「中間」と〈中間〉』であるが、内容的には理解できるが、違った言葉を使用したほうがわかりがよいのではないのか。

○夢からの切り込み方は、ユニークである。今までの熊楠研究は暗中模索の中で目標を持たないままに研究がなされてきた。しかし、この論文ははっきりとした目標を持って、全体像を予想させてくれる。この点で秀逸である。読後感として、生きることの不思議さを感じさせてくれた。

○筆者独自の世界観が提示されていて、興味深く読むことができた。

●筆者が〈中間〉として表そうとしている事態は、ただ「根源的な場(南方曼陀羅でいえば「大不思議」と「理不思議」の間、あるいは「大不思議」)」として、そこへ向かってすべてが収斂していると考えるのではなくて、むしろその「根源的な場」のいろいろなバリエーションを描いてもらいたかった。

●ユング等を、無前提に自らの論理に入れ込むのは少々気になる。先行研究はよく渉猟されているのだが、言及が少ないのが気になった。したがって他者との議論を回避したモノローグのような論の運びになっているような印象を持った。

●南方曼陀羅は違った読み方もできるのであって、そのことへと言及しつつ自らの考えを述べるべきであった。

また、南方曼陀羅の「理不思議」と「大不思議」との差異について、筆者は単に「不明瞭な融合」と「より完全な融合」として、単に程度の差のように説明しているが、それでは「大不思議」は説明し切れてはいないのではないのか。

●第５章で、「採集」を「取り入れ同一化」、「観察」を「投影同一化」としているが、確かに同一化には二つのあり方があることは理解できるが、観察を投影とすることがよくわからない。同一化の二つの方向を単に熊楠のあり方に無理やり当てはめただけではないのか。

以上のように、４名の審査委員は、それぞれの審査の感想を語った。そして結論として、当該論文を審査委員４名が全員一致して、博士論文として十分であると判断した。

審査委員

主任審査員	早稲田大学社会科学総合学術院	教授	那須政玄
審 査 員	早稲田大学社会科学総合学術院	教授	内藤明
審 査 員	明治大学野生の科学研究所所長	教授	中沢新一
審 査 員	高野山大学文学部	教授	奥山直司